大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

植物学者・西村真琴の思想と実践（その2）：思想の形成とその社会的基盤を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003405

植物学者・西村真琴の思想と実践（その２）
―思想の形成とその社会的基盤を中心に－

土　井　洋　一

はじめに

前号では、最初に西村の主要な著作をあげ、それらと先行研究・参考文献資料に拠りながら「年譜」を紹介し、若干の解説を付した。続いて、15年戦争下での全日本保育連盟の位置づけとそこにおける西村の果たした役割を主たる対象に、実証的な考察を行なってきた。そこで、今回は、晩年（戦後）の豊中市での活動とその後をにらみながら、一人の自然科学者の社会認識の芽生え、その生命哲学の形成過程を跡づける。その上で、一見ばらばらな彼の多様な活動形態を多面的にとらえ直し、その原理的な構造を明らかにすることにしたい。

４．自然科学への憧れと社会認識の芽生え

１）幼少期の西村

彼の生い立ちを知るために、欠かすことのできない文献がある。それは、1934（昭和）年に自費出版された『白妙亀』という小冊子である。この文献に一度触れてみたいと思い八方手を尽くしてみたが、先行研究でも指摘されているように、どうやら豊中市在住の歌人・松尾逸子氏（真琴の長女）の許以外に見当らないことがわかった。そこで、豊中市史編纂課から松尾氏に問い合せていただいたところ、過日の阪神大震災でご自宅が全壊し、それどころではない状況にあることが判明した。したがって、ここでは、この文献に唯一あたっている先行研究（『保育に生きた人々』所収の水野浩志論文）を中心に、西村の著作にも拠りながら、彼の幼少期に後年の生き方を解く鍵があるか否かを検討してみよう。 父源逸は、地方名望家を地でいくような人であった。明治維新の前後を問わず、村人たちの尊敬を一身に受け様々な農事改良事業に尽力する一方で、村会議員や町村連合会議長としても活躍している。さらに、明治初年には北海

道開拓団を組織し、そのための研究やアイヌ民族の資料収集を行い、資金を調達してまさに実行に移す段階で母の病から断念したという。その母せつは、宗賀村（現塩尻市）の庄屋、平出家から嫁いだが、和歌のたしなみを持っていた。優しく気丈な女性で、夫亡き後の家算が傾く中を、足袋仕立ての内職に明け暮れながら長男の多寿、次男の真琴、長女のしな江を育て上げている。

1935（昭和10）年、西村が刊行した『凡人経』と題する絵入随筆集は、母の長寿（81歳）を愛でてのものである。元気に、孫子の世話をやいたり歌をつくって暮らしている「母は童心にかへったものか近年絵をみることがすきになって、孫らと頬を触れ合って絵本をみていることが縷々あります。で、私も折りにふれて絵をかいては、それを話題に物語ることが務めの一つであるやうになって来ました」と、「序」にはある。心暖まる序文を寄せた島崎藤村は、前年にせつから20首の歌を贈られ、「いつはりも飾りもないものは風雅に近い」との返信を送っている。

また、この書には「峠のおいん」という一節がある。幼い頃、背中にくくって子守してくれた勝気な女中・おいんは、彼にとって忘れがたい人である。その後、仲良くなった男と村を出ていったきり戻らなかった彼女と、西村は偶然に再会した。広島高等師範学校に入学する途中、上田へ出る猿ケ峠の茶屋で、お茶を出した女のことである。女は彼の郷里を知るや根掘り葉掘り素性をただし、「私も以前住んだことがございますので……お父さまやお母さまはお達者でございますか」と、唐突にたずねた。「青年（真琴－引用者注）はうろたへ黙ったまま頷きました。頷いた目を再びちらと見上げた時今度は姉のやうに、懐かしい心の状態で、油の匂ふ髪を眺めることが出来ました。と、不思議なことにその時ふと、おいん－十四、五の『野つ原に咲く花』のやうな新鮮な子守の面影が、彼の脳裏を掠めて過ぎ」ていった。「兄さん、お体を一番大事になすって下さいまし、またお帰りはきっとこの道をお通り下さい。きっとですよ」と何度も念を押した女は、峠からいつまでも見送ってくれた。その夜、彼は上田の宿で「闇の中を、白い手のちらちら、ゆれる夢を見て」いる。約束を守って冬休みで帰省する時、峠の茶屋を訪ねてみたが、そこに彼女の姿はなかった。帰宅して母にそのことを話すと、母は「それはきっとおいんだよ。名乗らなかっ

たって！それは家出した昔の身を恥ぢてだよ。可哀さうだね（後略）」と語った。

彼は「今もなほ、この世のどこかの一隅に、多分ながらへていてくれるであろう峠のおいんと、しみじみ昔を物語ってみたい欲望が、彼には時々潮のように迫ってくるのです」という三人称の文体で、この節をしめくくっている。ここには、西村一家と女中・おいんとの関わり、それにも増して真琴とおいんとの複雑で深い人間的な関わりようが、如実に表現されている。女中を「お手伝いさん」と呼び変えれば民主的であるかのような風潮は戦後のものであるが、当時にあっては女中奉公はかなり一般化していた。中には、家人に厚遇され、なついて家族同様に扱われた者もいたのである。筆者に彼と同じ体験はないが、田舎町の使用人の多い商家で育ったのでそれに近い体験がある。そう言えば昔、左幸子主演の「女中っ子」（由紀しげ子の小説の映画化）を観て、不思議な感動を覚えたことを思い出す。寅さん映画でお馴染みの山田洋次監督もまた、自己の生い立ちを語る中で女中だった女性との心の交流に触れている。[1] 西村にとって、母は言うに及ばず、おいんという女性の存在がどれほど大きな心の糧になってきたものか、読む者にはひしひしと伝わってくる。もちろんこれには、文学的才能に恵まれた彼の表現力のせいもあるに違いない。

倉科平の西村真琴伝に、このおいんとの関わりの一部始終が詳述されているのも、筆者には十分了解できる（ここでは、紙数の制約上、ほんのさわりだけしか紹介できなかったが）。生涯を愛他的な生き方を貫いて生きた西村真琴の人格の下地は、こうした幼少期の養育環境の中で形成されたのではなかろうか。彼が小学校に入学した時、不登校の症状を見せて両親を困らせたことも、こうした育ちと関係があるように思われる。[2]

彼が中学校に入学する以前に没した父から、どのような影響を受けたかはわからない。しかし、後年の西村が歩んだ軌跡から、父との類似点をいくつか挙げることはできる。第一は、父が飛翔しようとして断念した北海道の地に、開拓団としてではなく自然科学者として赴くことになったこと。水野浩志は、彼が「北海道帝国大学教授となり、アイヌ部族の生態研究やその救済にあたることになったのも、これは父の影響によるところが大きかったといえる」と、述べている。[3] 第二は、その「北海道開拓団」を「満蒙開拓団」に置き換えてみ

た時に明確になる。後年の西村が満蒙の地に親しんだのは、父の影響というよりも、後述するように松本中学校時代の影響が大きい。しかし、父の時代の主たる開拓地が北海道であったように、真琴の時代の主たる開拓地は満蒙であった。国内で満蒙開拓に労働力を供給したのは貧しい農村を抱える地域ばかりであったが、その中でも長野県は全国第一位の供給県であった。彼の満蒙関連の著作から、ことに長野県出身の開拓団への思い入れを読み取ることができる。(4) 長野県出身の作家・井出孫六は、満蒙開拓に送出された約27万名のうち、長野県だけで約3万4千名(全体の12.5%、第二位の山形県の2.4倍)を占めたことに「耕地の少い山国のしからしめるところであったとはいえ、異常な送出状況だったといわなければならない」と、述べている。(5)

第三は、父と同様に、晩年の西村が豊中市議会に議席を占めたばかりか、短期間とはいえ市議会議長まで務め、地方政治に関わったこと。もっとも、彼の場合は周囲からかつがれた結果であり、政治に適性があるわけではなかったので持続しなかったまでであるが、父と子の人生には期せずして重複する部分があったのである。

彼は、父からたゆまぬ向上心と新しい事態に臆することなく立ち向かうチャレンジ精神を、受け継いだのではないだろうか。

2)松本中学校時代

西村は、里山辺小学校、同校高等科を経て、満16歳で松本中学校に入学した。倉科の評伝によれば、最優秀の成績で合格したという。その間、父が没し家計が傾いて一家は貧しい生活を余儀なくされたようである。松本中学校(現松本深志高等学校)は、長野県を代表する県立の中等学校で、その歴史は古くあまたの人材を世に送り出してきた。諸文献によると、在学中に大きな転機がおとずれたようだが、今一つはっきりしない。

そこで、筆者は現地調査の目的で、彼の郷里、松本へ出かけた(1996年11月)。その折りに、市民タイムス編集部、松本深志高校同窓会事務局の方々から、貴重な情報・資料を提供していただいた。また、同校卒業生の親しい友人からは、同校史2冊を借り受けることができた。折しも、同校同窓会事務局では『深志人物誌Ⅱ』(創立120周年記念出版)刊行の最終作業に追われていた。創立110

周年記念としての『深志人物誌Ⅰ』は、その時に拝見した。今回の対象者32名の中には、25回卒業の西村真琴が含まれている。遺伝学の田中義麿（22回）・心理学の青木誠四郎（34回）・動物学の犬飼哲夫（37回）・社会学の臼井二尚（39回）・教育学の宮坂哲文（57回）他、学者が11名と断然多い。あとは文芸評論・小説（44回の臼井吉見、47回の中村武志ら）以下、絵画・彫刻・詩・演劇・教育・労働運動・実業・政治等、多岐にわたっている。変わったところでは、『きけ、わだつみのこえ』で有名な上原良司（61回）がいる。総じて学問・芸術・文化の領域に著しく偏っているが、この偏りは選択基準の恣意性によるものではなく、実はこの学校の校風と深い関係があるようだ。[6]

『深志人物誌Ⅱ』は、本年１月中旬、本稿脱稿時にあった私のもとへも届けられた。本書によって新たな知見に触れることができたので、可能なかぎり活用させていただくことにした。[7]

(1) 恩師・松原栄との出会い

ところで、西村が在学した当時の松本中学校（以下、松中と略す）はいかなる状況にあったのか。そこで彼は何を学び、どのような対社会・対人関係を築いたのであろうか。

西村は1935（昭和10）年11月１日の同校創立50周年記念講演会に講師の一人として招かれ、「我が運命を決した松本中学」と題する講演を行なっている。この内容は重要なので、以下、その一部を紹介しながら論を進めたい。彼は「我が半生涯の波瀾の原因が松本中学にスタートを切っていることを考えると感慨無量であ」ると、冒頭で語っている。[8] 彼には、名物校長だった小林有也の面影とともに、いや校長よりもはるかに深い次元で心に刻みこんだ恩師がいた。博物担当教師の松原栄である。彼は、旧松本藩の儒者で松中でも漢学を教えた松原葆斎の長男で、後述する松原温三（尚志社の創立者）の実兄にあたる。[9] 東京帝国大学で地質学を専攻（選科２年修了）した。

その松原に「諸君は時代眼を常にもて、前途を見通して青年の間から志をたてられよ、根強く進むことだ、それにつけても支那大陸の将来は諸君のために活躍すべき舞台だぞ」と鼓舞された生徒の一人が西村であったが、さらに「私などは早速先生の言に感動した一人であって、中学を卒業する時には『俺は支

那におし渡るんだ』と強い強い決心をもっていました」と語っているように、彼は、松原栄というどちらかというと地味な部類に入る教師の影響を存分に受けた、数少ない生徒の一人であったように思われる。[10] 筆者が同校史を精読したかぎりでは、小林校長以下、多くの頁を割かれて同窓生たちの思慕の対象となっている幾人かの教師たち、さらに同校在学中からカリスマ的存在であった実弟の温三らと異なり、この教師はあまり目立たない存在に映ったからである。しかし、西村にとってはそうではなかった。もっとも西村の方も、同期生が「当時はまだ格別のことはなく、のちに生物学では日本的学者になったときいて、おどろいているくらいだ」と語るように、学業成績は別にして目立った存在ではなく「内向的で大人しい奥手の少年」であったらしい。[11]

元来文学志向であった彼は、ある日、松原に進路の相談を持ちかけた。「それは自然科学が一番よい。動物や植物を学ぶと宇宙万有の中における人類の位置が判然としてくる、これが生命哲学をつかむ上に一番早道だ。まず自己を深く掘り下げてからでないと腰がすわらない。勝負は死ぬまでつづく決して中途で棒を折っちゃだめだ！」「私はまたまたこの論旨にも感動して遂に自然科学を習得」する道を選択した。ここに、西村の将来図は定まった感がある。松原は「支那革命の時がきたら、幾多の日本人の提携を要求する」云々とも教えたようだ。そのことが「私の念頭にまざまざ甦って忽ち孫文に憧れて渡支工作に骨を折り（中略）結果は二十代の七年間を横目で支那を睨みながらこの満州で暮らしてしまった」と述懐している。すべての生徒がそうであったとも言えないであろうが、当時の中等教育においては、教師の一挙手一投足が、生徒にいかに多大の影響力を持ち得たかがわかるであろう。西村自身も、肯定的な意味ではあるが「おそろしいことは、先生の言動が屢々生徒の一生を左右する事実である」と、講演の最初で語っている。

1902（明治35）年度の時間割と教職員組織を調べてみると、松原は第1、2、3各学年に週2時間づつ配置されていた博物を、一人で担当している（この年度、西村は第4学年)。松原の就任時期は明治32年4月、離任時期は同44年3月となっており、その就任時期は西村の入学時期とぴったり重なる。満37歳で赴任した松原は在任中、地理・英語も担当したようだが、この当時は専門の博物の

みを担当していた。ちなみに「博物」とは、「博物学の略で、動物学・植物学・鉱物学・地質学・古生物学など天然物の記載やその歴史の研究を主目的とする分野の旧称」(『広辞苑』)であり、「中学校令施行規則」(第一章の「学科及其程度」)にしたがい学科目の一つに定められていた。「長野県尋常中学校教科書配当一覧」(明治30年4月から実施計画)によると、第一年で普通植物学、第二年で普通動物学、第三年で普通鉱物学と博物学生理ノ部、の教科書が用いられている。[12]

松原栄は、西村にその後の自然科学への道程と社会認識の原型を準備するキイマンであった。明治36年3月、大阪で第5回内国勧業博覧会が開催された折、西村は一人で見学に行っている。当時の情報・交通事情からして、そんな地方の中学生が当時何人いたであろう。その後の生き方からすれば、このエピソードは彼の面目躍如というところである。

第1表　毎週授業時数一覧

学科目／学年	修身	国語及漢文	外国語	歴史	地理	数学	博物	物理及化学	法制及経済	図画	唱歌	体操	計
第一学年	一	七	七	三		三	二			一	一	三	二八
第二学年	一	七	七	三		三	二			一	一	三	二八
第三学年	一	七	七	三		五	二			一	一	三	三〇
第四学年	一	六	七	三		五		四		一		三	三〇
第五学年	一	六	六	三		四		四	三			三	三〇

第2表　教科書一覧

初等均整算術	一、二、三	同	廿四年十月	
初等代数学	上下二	同	廿五年三月	佐久間文太郎編
代数学教科書	一、二、三、四	同	廿年十月	藤沢利喜太郎、飯島正之助訳
初等幾何学教科書	二	同	廿五年四月	菊池大麓編
初等平面三角法教科書	一	同	廿六年八月	菊池大麓沢田吾一合纂
対数表	一	同	十九年七月	英人チャンバー
博物ノ部				
普通植物学教科書	一	同	廿六年四月	二好学著
新選普通動物学	一	同	廿七年十二月	石川千代松著
鉱物学教科書	一	同	廿五年十一月	富士谷孝雄著
博物学教科書 生理之部	一	同	廿七年五月	平沢金之助著
物理ノ部				
近世物理学	二	同	廿七年七月	水島久太郎編
化学ノ部				
中等教育無機化学書	一	明治	廿六年九月	宮島道正著
理化学示教	一	同	廿八年三月	沢吹忠平著
習字の部				
千五百帖	四	同	廿四年十二月	吉田晩稼書

初等均整算術	同	東京神田裏神保町 亀井忠一		
初等代数学	同			
代数学教科書	同	東京日本橋銀座一丁目 大日本図書株式会社		
初等幾何学教科書	同			
初等平面三角法教科書	同			
対数表	東京芝区柴井町 松井忠兵衛			
博物ノ部				
普通植物学教科書	敬業社			
新選普通動物学	富山房			
鉱物学教科書	金港堂			
博物学教科書 生理之部	東京日本橋区大伝馬町三丁目 長島文昌堂			
物理ノ部				
近世物理学	京橋区通四丁目 春陽堂			
化学ノ部				
中等教育無機化学書	敬業社			
理化学示教	大阪東区本町四丁目 岡島書店			
習字の部				
千五百帖	東京日本橋区通一丁目 大倉書店			

千字文	四	不詳	菱湖書	東京本書横川町 杉本要蔵
画学ノ部				
中等教育用器画法解式共	四	明治廿七年五月	竹下富次編郎	敬業社
中学画手本	八	同	廿八年八月	浅井忠編
中等用器画法解式共	六	同	廿八年九月	井吸陸二郎編
農業ノ部				
日本農業書	二	同	廿七年七月	森要太郎著
商業ノ部				
経済原論	一	同	廿六年四月	天野為之著
商用簿記学	一	同	十八年九月	竹田等輯
体操ノ部				
普通体操法	一	同	廿五年十二月	文部省
歩兵操典	一	同	廿四年八月	陸軍省
体操教範	一	同	廿三年八月	小林又七

千字文				
画学ノ部				
中等教育用器画法解式共	金港堂			
中学画手本				
中等用器画法解式共	同			
農業ノ部				
日本農業書	富山房			
商業ノ部				
経済原論				
商用簿記学	丸善書店			
体操ノ部				
普通体操法	大日本図書株式会社			
歩兵操典				
体操教範	同			

（２）自治活動と尚志社

西村は第５学年の時、相談会副会長となった。相談会は、矯風会とともに「松中の二大自治機関といわれてきた」。前者が明治20年、後者が同30年設立で、ともに生徒集団の主体的な自治組織として生成したが、この当時は、学業成績優秀な者の中から学校側の指示で会長・副会長が選任されるようになっていたという。明治34年９月～36年６月の相談会の任務は、孤児院に対する寄付、修学旅行、選手遠征派遣費補助、兎狩の日程、上級生と下級生との礼儀、昼食時の湯の請求、皇太子奉迎、靴で教室への入室、運動会の日程、教職員への餞別、といった案件の決議であり、極めて穏当なものであった。なお、「孤児院に対する寄付」とは、岡山孤児院長・石井十次が孤児を連れて当地を訪れるにあたり、各人から２銭づつ徴収して10円を寄付することを決議（９月３日）したことである。西村 は当時、石井十次と出会っていた筈である。いずれにせよ、彼の役員生活もそのようなものであったと思われる。[13]

当時の松中には、学校の管理下にあった自治寮の他に、自治寄宿舎という校外活動団体が複数存在した。その中でも「保守的東洋的な尚志社と、進歩的欧米的な良有会」の両翼が対抗し、教師のタイプ分けをすると、松原栄は尚志社的風格の持ち主だったという。[14] 在学中に勃興した尚志社の存在に、西村も無関心ではいられなかったに違いない。彼もまた、卒業時に尚志社に関わった師・友人たちと記念写真におさまっている。同窓会事務局で見たその写真では、彼は皆から少し離れて左端の石の上に座っていた。

尚志社の由来については多くの文献に譲るとしても、[15] この結社のことは、松原温三（1969－1901）という国士タイプの一人の若者抜きには考えられない。彼は「中学時代から時勢の刺激を強く感じて眼を東亜の形成に注ぎ、大陸発展を論じ強い征露意見を抱いて同輩に説き立てて居たが」明治20年、松中４年次で中退し、海軍軍人を志して海軍予備校に入ったが体格不十分のため海軍兵学校進学の道を断たれた。その後、尚志社建設に先だち、彼は九州・福岡の玄洋社を訪ねてその社風に打たれ、示唆されて帰ってきた。玄洋社は、温三の尚志社創立構想にとって有力なモデルとなったのである。[16]

玄洋社は民権運動団体の向陽社を前身とするが、当時は大陸進出を綱領に掲

げ、対外強硬を主張する国家主義団体に変貌していた。日露戦争でも対露強硬論を主張し、軍と結んで大陸の特殊任務を引き受け、大陸浪人を生んだ。韓国併合や初期の中国革命にも参画している。[17] 西村の2期後輩で、明治35〜39年、尚志社の外舎生(寄宿舎で寝起きする内舎生に対して、家から通う者)であった棚橋小虎も、玄洋社の尚志社設立への影響を認めている。[18] また、棚橋より9期後輩の酒井治左衛も「後年になっても先輩は玄洋社の社風を物語ったものである」と回想している。[19] 当時は、こうした青年たちによる塾風の結社が、全国各地に生まれつつあった。

信山尚志社の創立会は、1900(明治33)年10月7日、東京の小石川区日向台町にあった寄宿舎において、松原温三以下、松中卒業生ら15名によって開催された。神田の山龍堂病院に入院中の温三を除くと、一高、札幌農学校、東京専門学校等の高等教育機関在学中の若者が大半を占め、当日出席予定で欠席した10名のうち、半数は陸海軍の若手将校(少、中尉クラス)であった[20](明治35年4月27日、尚志社と改称)。

「尚志社社則」は全12条から成る。本社を東京に、支社を長野県下の各地に設け(第1条)、その対象を「信州出身、又は縁故アル者ニシテ成年者」に限り(第8条)、それ以外の同志を社友(第10条)、思想・財政面での助力者を賛助員(第11条)とした。評議員・幹事他の役員が決定し、社員56名、賛助員20名が挙げられた。松原栄も、賛助員の一人に数えられている。尚志社の事業方針の核心部分は、寄宿舎の設立とその運営にあった。

東京寄宿舎(明治33年9月3日設立)の他、信山尚志社創立を機に以前からその基盤があった松本、飯田に、少し遅れて長野にも寄宿舎が設立された。[21] 松本では、明治34年11月、40名が参会して舎会を開催。翌年5月には、春季大会を開催(63名参会)し、教師では松原栄と山下勝太郎(化学・数学担当)が出席した。翌36年4月の松本寄宿舎大会(77名参会)では、小林有也校長の訓示と松原栄の「本社の目的」と題する講演があり、9月には寄宿舎が新築された。「松本寄宿舎新築趣意書」は、この頃すでにあった学生の風紀の乱れを憂え、人作りの大切さを改めて訴えている(その文体と内容から、これは松原ら学校関係者の手になるものではないか)。[22]

小林校長は、1914（大正３）年６月９日に没するまでの29年間、現職を貫いた。信州を代表するこの教育者は、大阪府の上級士族出身、大学南校に学んだエリートで物理学・数学を教えた。一見風采の上がらない小柄な無口の人であったが、不言実行型で無言のうちに生徒・卒業生に大きな感化を与えた。西村もまた、小林校長が好きであった。後に京都で教壇に立った時、「あの真面目なる目元、あの意志強き口元を真似る心持ちとなった」と告白している。[23] 小林は「明治国家体制に忠誠心をもつ一種の国家主義者であった」から、「国家有為の青年の育成の場として自治的機関を認め、“一大塾的”な雰囲気をもつ松中に、日露戦争後、個人主義的傾向、社会主義的傾向、自然主義文学への傾斜など、明治の儒教的生活規範を打ち破る動きがあらわれたことは、精神的な堕落と考えられた」とも評されている。[24]

５．植物学への道と生命哲学の形成

１）植物学へ道

彼が広島高等師範学校博物学科に入学した1904（明治37）年、日露戦争が開始された。自然科学系の学校とはいえ、彼は東京圏への進学コースを採らなかった。東京高師もあったが、当時すべてを官費で学べる最難関校の一つ、広島高師を選択したのには家庭の経済事情もあったのではないだろうか。兄の多寿もまた、苦学して医学を修めている。長野県下で、同年に広島高師に合格した者は他にいない。在学中、彼は植物採集に明け暮れ、四国遍路を体験した。松山の道後温泉では、多くのロシア兵捕虜が収容されているのを見て驚いている。[25] 当時の日本にはまだ、ジュネーブ条約（1864年の「戦時軍隊における傷者および病者の状態改善に関する条約」）を遵守しようとする姿勢があったのである。しかし、「おのれのみが正しい“聖戦”である、という認識」を増幅させ、増長して国際法を無視するに至るその後の戦時体制こそ、彼が身をもって体験することになる１５年戦争の過程であった。[26]

1908（明治41）年、彼は、２５歳で広島高師を卒業。京都府下で２年間、初等教育に従事した後、待望の満州に渡る。遼陽小学校長として満州人子弟の教育にあたりながら、各地で植物採集を行なった。初めて研究職に就いたのは、

明治44年のことである（奉天の南満医学堂生物学教授）。その当時、兄は南満州鉄道病院長であった。西村は、その兄嫁の実妹で、しかも実のいとこにあたる手塚かずをと結婚することになった。彼女は松本高等女学校（第2回卒業）、日本女子大学校家政学部（旧制第3回卒業）に学んでいる。彼女はその後、三人の子どもを抱え幼稚園教師をしながら中国大陸に残り、夫の米国留学を支えることになる。それは、彼女にとって思いもよらぬことであった。[27]

南満医学堂時代の彼は、研究室にとじこもることなく足を使って満州全域の生物分布の研究・調査にあたっていたが、人生第二の転機は意外なところから訪れた。ある朝、満州日々新聞の「植物学の泰斗エナンデル博士日本へ」という見出しに目がとまったのである。このデンマークの植物学者は柳の研究で世界的名声を博していたが、今度の旅行で黒龍江一帯の植物標本を所蔵するハバロフスクの植物博物館に立ち寄るために、シベリアを経由するらしい。彼は胸躍らせ、あきれる妻を後にハルビンへ向ったが、当の博士とはまるで面識がない。やっと駅で会えても言葉が通じない。しかし、言葉は通じなくても親しくなれるものである。博士につき従ってハバロフスクへ。そこで出会ったコマロフという学者は満州シベリアの植物を研究し、「未解決の種類を一括して6年間も欧米を擔ぎ廻って、北満シベリアのフロラを大成した」植物分類学の碩学であった。

コマロフの偉大な業績に直面した時、彼の頭の中には「革命の種が宿ってしまった」。帰宅した彼が妻に放った最初の言葉は、「僕はもう、満州生活を打ち切る！」であった。欧州で世界大戦が始まったこの年、彼は米国行きを決意する。シベリア旅行にさえ驚いていた妻は「渡米と聞いて、唯々魂消る（たまげる）のみで、一言も出なかった」という。[28]後年、彼は、二人の優れた植物分類学者との邂逅に端を発する心境の変化を「これまでこびりついていた支那に対する強烈なる野望が始めて夢のやうに醒めてしまって奉天なる我が家へかへった時はもう私の心は欧米へ飛んでいた」と述べている。[29] 戦火の中の欧州行きを断念し、米国に渡った後、さらに終戦後の欧州各地に学んだ彼のその後の軌跡からすると、この第二の転機は、振り子が一方の極から対極へ大きく移動したようなものだといえよう。

満6年以上に及ぶ彼の欧米での研究生活はすこぶる順調で、『大地のはらわた』(1930)、『科学随想』(1933)他の自著にもそのあらましが描かれている(前号の「西村真琴・年譜」参照)。しかし、やがて国際社会、しかもこだわり続けたアジアー中国大陸を離れて欧米で過ごした6年間に終止符を打つ時がきた。1921(大正10)年10月、留学から帰国した西村には、北海道帝国大学水産専門部教授のポストが用意されていた。実は英国滞在中の前年に、彼は北大の前身、札幌農学校を象徴する新渡戸稲造に出会い、その実力を認められていたのである。[30] 1920年当時、新渡戸は国際人として活躍中で、5月には国際連盟事務局次長となり、当初ロンドン事務所に、その後はスイスのジュネーブに滞在していた。[31] 西村の研究生活は、以後、約束されたようなものであった。

北海道帝国大学農科大学は、1918(大正7)年 4月、東北帝大から独立し、それまでの水産学科を「付属水産専門部」と改称した。西村は、そこで水産植物学と浮遊生物学を担当することになったが、何も知らずに赴任した新しい職場は、大騒動の直後であった。[32] 水産植物学講座の前任者・遠藤吉三郎教授は、定年や栄進で去ったのではなかった。彼は東京帝国大学理科大学動植物学科を卒業し、1907(明治40)年 4月、札幌農学校教授に赴任して以来、優れた学究として重きをなしてきた。この若きエリートを札幌農学校に招聘したのは、新渡戸の同期生で同校のもう一つの顔とも言うべき、植物学の泰斗・宮部金吾である。[33]

ことの起こりは、1918年9月、同僚教授の文部省科学研究費不正受給問題で追及の急先鋒となった遠藤教授の「僕の家」と題する痛烈な風刺文が、翌年1月の北海タイムス紙に掲載されたことにある。これを大学への攻撃文と受けとめた当局は、遠藤を休職処分にした。生徒達から人気のあった同教授の復職運動が直ちに起こったが、佐藤総長がこれを認めなかったために同部生徒の集団退学届の提出、集中講義に予定された他校教授のボイコット、同講座助教授の義憤による辞職、文部大臣への復職の陳情、あげくに一生徒が自殺を図るという騒動にまで発展した。帝国議会でも問題化し、中橋文相は予算委員会で答弁を求められている。遠藤は復職することなく、1921年3月14日、仙台の大学病院で肺結核のため48歳で死去した(経済学者の遠藤湘吉東大名誉教授は五男)。

結局のところ、北大百年の裏面史として今も語り継がれるこの「遠藤事件」が、西村を北大に招き寄せたことになる。確たる裏付けがあるわけではないが、このやっかいな後任人事は、宮部と新渡戸のホットラインのもとでひそかに進められていたのではなかろうか。西村の学識、人柄が買われたのはもちろんであろうが、彼が広島高師の出身で学閥からはずれていたこと、長い海外研究生活で国内には未知の魅力があったことも幸いしたに違いない。

札幌で、久しぶりに一家団らんの生活がはじまった。次男晃、三男昭三も、生まれた。しかし、北海道を代表する淡水浮遊生物・マリモの研究に没頭し業績を上げた[34]彼も、一流の水産植物学者で海藻の専門家、遠藤教授の後任者として「講義には苦労していた」という。決して順風満帆の研究生活ではなかったのである。だが、この地で彼の天分は、多方面で発揮されることになる。まずは油絵である。かつて、札幌農学校に在任した有島武郎らによって創設された黒百合会は、学生・教師を会員とする美術サークルで、今も活動を続けている。彼はここに属し、異彩を放った。[35]個展を開き好評を博したが、その収益金千円を札幌市豊平のアイヌ貧民救済のために寄付している。このあたりには、父源逸の影がちらつく。次には文筆である。1926(大正15年)7月、副業として書いた「五十年後の太平洋」(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社共同の懸賞論文)は、選外佳作となった。応募資格は無し、審査員は志賀重昂、後藤新平、大河内正敏ら12名、一等賞品は旅費 6,000円で欧米視察、であった。[36]しかし、この副業が彼に一大転機をもたらすことになる。その翌年に彼は北大を退職し、その大阪毎日新聞社に迎えられることになったからである。

西村の北大在任期間は、1921年 7月から1927年12月までの約6年半にすぎない。いかに多芸多才の主だとしても、研究者の身分を捨ててジャーナリズムの世界に転身するには勇気が要る。簡単に決断できるものではない。この転職理由について、彼は何も語っていないが、芳しくない事態はあった。東北帝大農科大学水産学科から北海道帝大農科大学付属水産専門部に改組された時点から、この小さな学内組織はいかにも不安定であった。1927年 2月には、文部省省議において水産専門部の独立、高等水産学校設置の件が審議されている。1929年3月、第56帝国議会において高等専門学校の設置を函館に定め、同付属専門部を

独立移転させることが決定した。その後も紆余曲折を続け、函館に現在の北大水産学部が設置されたのは、1949（昭和24）年 5月のことである。[37] つまり、西村の転職の背後には、そうした学内事情があったのである。

そうした背景が仮になかったとしても、この自由人にやはり転機は訪れたのかもしれない。その後の大阪での彼の生活は多彩多忙を極め、当然に研究中心の生き方は不可能になった。しかし、この選択が正しかったか否かを、いまさら部外者が論評することはできないように思う。ともかく彼は、1927(昭和 2）年12月、時の大阪毎日新聞社社長奥村信太郎の強い薦めもあって、「特別取扱社員、契約期間満5年、一号一級、参百円」という待遇で同社の論説委員・学芸部顧問として新天地、大阪に赴くことになった。ちなみに、彼が北大教授に任官（高等官六等）した当時の手当年額は二千円を超えているが、特別手当を含むその後の昇給額を想定しても月額参百円というのは、同社が西村に対していかに破格の条件を提示したかがわかる。[38]

2）社会認識と生命哲学

当時、大阪毎日新聞社（毎日新聞社の前身）はわが国有数の大新聞社で、『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』の二紙を発刊していた。ことに「新聞は商品なり」とする第五代社長本山彦一（1853～1932）の経営方針の下で、両紙は『朝日新聞』とともに近代的商業新聞に躍進していた。[39]

(1) 大阪毎日新聞社の懸賞論文

彼の同社懸賞論文「五十年後の太平洋」は、科学啓蒙の視点に時局認識をおり混ぜたユニークな論説である。タイトルが示すように、これは1980年前後を想定した未来学的企画であった。当時、本山社長は「君の論文は選外ではあったが、流麗なる文字を以て、未来の大予言を、詩の如くに現はした点において、他に類を求め易からざるものであった。況んやその立論の基礎が、君の専門たる科学的検討にありしをや、特にその各章の前文をなせる数行は、或は無韻の詩であり、鋭利なる警句であった」[40] と称賛したが、決して美辞麗句とは思えない。

自然環境保護と食料資源確保を両立させる養殖技術、海底石炭や海風の利用、

汎太平洋学術研究所の壮大な構想、他に海中遊覧船構想などの楽しい話題もある。筆者は科学技術の発展過程と現在の水準に疎いので詳細がわからないが、それでも随所に見出される卓見には魅了された。「十八、仮想の敵」では、ハワイ諸島攻防に端を発する太平洋戦争を予見している。その内容は、現代の若者に戦争ゲームを売りまくるファミコン業者の無節操さとは無縁である。前文には「けたたましく咆哮するものは、みづからの疑心に暗鬼を創造するものである。牙あるものは、此時、牙に訴え、爪あるものは、此時爪を用いる。武器の鋭鈍が文明の尺度であるような当世は、どうしても、一度、火の空、火の海を出現せしめねばやまなかった」[41]とある。これが痛烈な警句であることは、太平洋をめぐる世界平和、その運動の可能性と深刻な問題点が各所で述べられていることから明白である。

彼は、海中遊覧船を軍事転用した潜水艦の技術競争と、航空戦中心を予期した高射砲・飛行機用救命装置の発明に注目している。ことに飛行機用救命装置に関しては、現実の今大戦で日本が海軍のゼロ式戦闘機に代表されるように、ひたすら機体のスリム化をはかるために搭乗員の命を二の次にして、消耗戦の泥沼に落ち込んだ事実を想起すると驚くべき慧眼である。なお、この時の一等作品（作者三好武二は、東京高工応用化学出身で朝鮮総督府官吏）の中にも、日米間の太平洋戦争が勃発しそうになるが、日本が開発した殺人光線とドイツが開発した人造人間が抑止力となって米国が折れ、平和が戻るという筋書きがあったようである。[42]

もっとも、日露戦争後、世界の政治的・軍事的力学は不透明になり、アメリカでホーマー・リーの『無智の勇気』（The Valor of Ignorance 1909）がベストセラーになった。日本でも『日米戦争』（1911）と題して翻訳出版され、ひろく読まれている。わが国においても「来たるべき黄白両人種の闘争を未来戦物語の形でさかんに書き始め」る風潮があり、ほとんどの戦場に太平洋が想定されたという。[43]

西村もまた、その「黄禍」（yellow peril）問題に無関心ではいられなかった。というよりも、汎太平洋平和の要件として、三つの鼎（日中、露、米の各圏域）の均衡構造に期待する彼にとって、この問題は避けて通れない。黄禍と

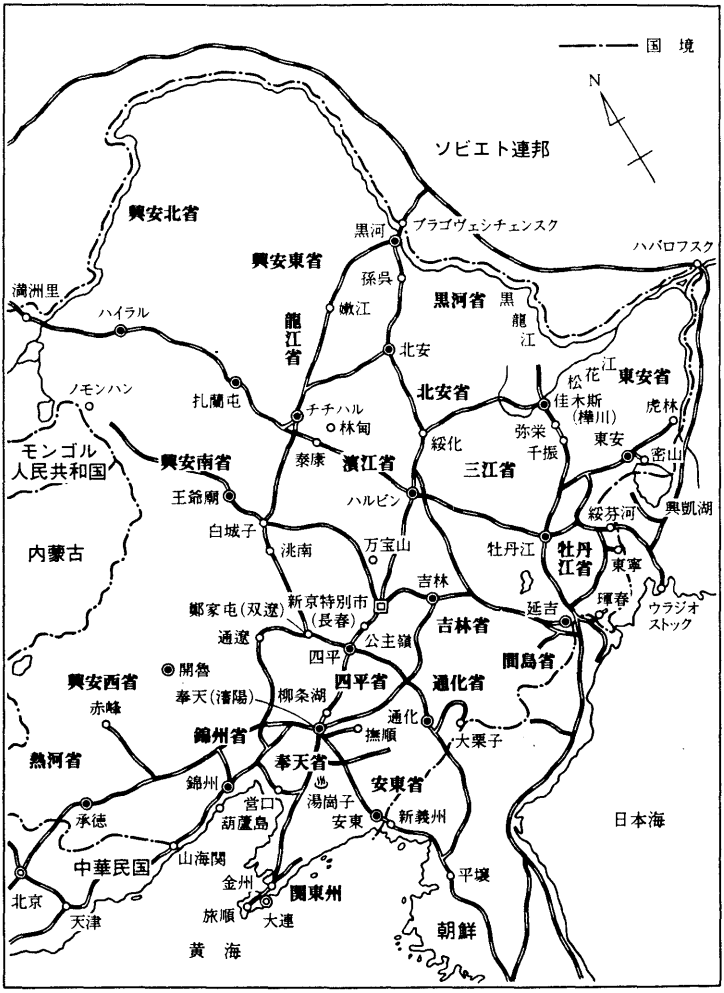
は、白色人種が黄色人種に対して抱く恐怖・嫌悪・不信・蔑視の感情を表現したもので、日露戦争以後、国際社会で急速に高まっていた。黄禍は、実は「白禍」と裏腹の関係にある。黄禍を意識してたじろぐ当時の日本人の多くには、欧米人に対する抜きがたい劣等感が同時に存在した。このコンプレックスに裏打ちされた攻撃性こそが白禍の特性である。アジア・太平洋圏にそれぞれの思惑で利権を得ながら、彼らが「日本を侵略的帝国主義其物のごとく誤認していたのは、寧ろ、滑稽ではないか」と、西村は言う。(44) しかし、今日から見て、欧州列強諸国同様、当時の日本が押しも押されもしない帝国主義国家に変貌していた事実は明白であるから、この指摘はあたらない。彼もまた「誤認していた」のである。ところで、彼の中国・満州に対する認識は、この論説段階ではどのようなものであったろうか。

「二十　世界の鼎」の中で、彼は次のように述べる。「もとより、満州は日本の防禦線であることは明らかである。しかし、これは東洋の盟主日本国としての防禦線であることを心得なければならない。（中略）また、あるものは、日支の戦争を予言しているが、いまの日支に対して、離間策を講ずるがごときは、新婚の夫婦喧嘩に生真面目なおせっかいをするの愚でなければならない」と。アングロサクソンは「アジアの家庭」を乱して欲しくないし、アジアに隣接するロシアの常識は、欧米人よりはるかに玄人の筈である。この不安定な三脚によって、太平洋の平和を維持する他に道はないというのである。(45) 汎太平洋諸国と諸地域の自然研究に長年携わり、中国・満州、ロシア、北米にも多くの知己を有する彼ではあるが、対社会認識の局面ではおよそ面目躍如というわけにはいかなかった。しかし、こうした言説を一笑に付すことはできない。この良心的な一人の自然科学者の言論が、当時大いに世にうけたとしても、この時点で時局に便乗するイデオローグに変身したわけではない。彼にそのような器用な所業ができるはずもなかった。その点を踏まえた上で、何故一笑に付せないかを、以下で考察してみたい。

(2)西村のその後の時局認識

現代史研究、とくに日中戦争を中軸にすえた15年戦争史研究の高まりは、近年めざましいものがある。そうした研究動向を視野に入れながら、彼の時局認

「満洲国」地図


国境
N
ソビエト連邦
興安北省
興安東省
黒河
ブラゴヴェシチェンスク
ハバロフスク
孫呉
黒河省
黒龍江
滿洲里
ハイラル
嫩江
龍江省
北安
北安省
松花江
東安省
佳木斯(樺川)
虎林
ノモンハン
扎蘭屯
チチハル
林甸
弥栄
東安
密山
モンゴル人民共和国
興安南省
泰康
濱江省
綏化
三江省
千振
興凱湖
王爺廟
ハルビン
綏芬河
白城子
洮南
万宝山
牡丹江
牡丹江省
東寧
内蒙古
吉林
延吉
琿春
ウラジオストック
鄭家屯(双遼)
新京特別市(長春)
通遼
公主嶺
吉林省
四平
間島省
興安西省
開魯
奉天(瀋陽)
柳条湖
四平省
通化省
赤峰
通化
撫順
大栗子
錦州省
熱河省
奉天省
錦州
営口
湯崗子
安東省
承徳
葫蘆島
安東
新義州
日本海
中華民国
山海関
平壌
金州
関東州
北京
天津
旅順
大連
朝鮮
黄海

識がやがて日中戦争を経て太平洋戦争に至るまでに、どのような変遷をたどったものか、限られた資料を通して整理してみたい。「太平洋戦争に至るまでに」というのは、この時点で主義主張を大きく変容した、あるいはさせられた人々が現実にいたとしても、それは対米認識の転換によるものであり、西村のケースは無論、基本的立場の位相はすでに泥沼化していた日中戦争の過程で出尽くしていたと考えられるからである。

日露戦争後から第一次大戦前の日本が、「国民心理の底流にあらわれた危機感を巧みに利用して軍備拡大をはかりながらも、(中略) 外交上ではひたすら協調的姿勢を守り、急激な衝突となることを回避することに努めた」という橋川文三の指摘は正しい。[46] しかし、シベリア出兵 (1918年8月) 以降、わが国が日露戦争で得た南満州の権益を不安定要因として田中内閣の下で第一次山東出兵が開始されたのは、西村が北大を退官した1927年のことである。若槻内閣の下、幣原平和外交の敗北の結果であった。田中膨張外交が関東軍による張作霖爆殺事件 (1928年6月) で失敗し、再び幣原外交に戻る[47] が、南満州の権益を越えて中国国内に領土の膨張をはかろうとする勢力は、国民世論を徐々に操作し力を増していった。この力関係の逆転現象は、政党と軍部間にとどまらず、軍内部、外務省内部にまで及んだ。すでに日本は、「南満、さらには満蒙の特殊の権益は中国から奪ったものではない」とする国際的な外交原則すらほごにしようとしていた。[48] 1931 (昭和6) 年9月の満州事変はその事態を一気に加速し、1932年3月の満州国建国、1933年2月の国際連盟脱退は以後の日中関係を完全に方向づけ、そして、1936年2月の2.26事件がとどめを刺したといえる。

西村がそうした深刻な日中関係の推移にどこまで敏感であったかはわからないが、1920年代当時は、実際にまだ水面下でのせめぎ合いが続いていたのである。だから、先に紹介した彼の日中友好論を、一笑に付すことはできない。しかし、彼は1935年11月の時点で、母校 (松中) の後輩に向けて「私などが満州に興趣を覚えてすら或は皇軍将士の慰問に或は日本学童使節を伴って皇帝に見え或は平和工作のために巡回病院を率いて蘇満国境に至る等々及ばず乍ら国家の欲する所にしたがって馳駆することが出来」たことを無限の喜びとして語った[49] が、もうこの段階では、「平和工作」と「国家の欲する所」を結合する道

はほとんど残されていなかった筈である。

そういえば、彼が大毎児童使節団長として中国各地を歴訪した1932年 2月、上海の三義里街で傷ついた鳩を持ち帰り、それが縁で魯迅との交流ができたという話があった。この話の経緯は、彼の『科学随想』の冒頭に書かれている。[50] 少し長くなるが、大事な部分なので引用しておきたい。村松梢風と二人で砲声におののきながら「あちら、こちらに身を潜めて語った。この鳩のことは是非魯迅あたりに聞かせたいものだ言い出し、幸いに氏の健在なることだけはつきとめたが、これ以上のことはあの場合としては死を覚悟せねばならなかった。当時上海の商家は堅く門戸を鎖して十圓紙幣を投げ出しても鳩の豆一粒さえももとめられなかったのだ。私は愈々この鳩をこの地に残しておかれなくなって日本へ伴れかへるべく準備した」。この後には、その鳩の生き生きとした描写が続いている。他愛のない話のようであるが、この人物の身辺には人間ばかりでなく、いやそれ以上に同じ生命をもった動植物の話がつきまとう。40日後に死んだ三義という名の鳩の墓「三義塚」が、中国公使重光葵によって記され、「この事はやがて魯迅氏に伝えられた。常に亜細亜民族発展といふ理想の基礎工事の杭として東西の知友がまづ握手すべきだといふ、彼我共通の心情は」、魯迅に「義三義塔」と題する漢詩文を贈らせることになった。その当時、身の危険にさらされていた魯迅は、命綱だった内山完造に「大阪の友にもおくるべきものを送った」と語ったという。

この話を西村から伝えられた同郷の作家、島崎藤村の文章が教科書にも載ったそうだが、そんなことよりも、筆者は激動のさ中にも「大阪の友」への義務を怠らなかった魯迅という人に、改めて深い関心を抱いている。魯迅は、晩年に「云ひたいことは随分有るけれども、『日支親善』のもっと進んだ日を待たなければならない」と語っている。[51] 魯迅は、最後の最後まで、幾人もの「藤野先生」を求めていたのである。[52]

(3) 結　語

西村の当時の文章に触れて、気付いたことがある。満蒙開拓に挺身する日本移民にとって、山東移民は強大なライバルであるが、日本人は彼らを「軽蔑してはならない。それよりも、まづ彼等に対するに、どれだけの覚悟、どれだけ

の忍耐、どれだけの持久力があるかを考へるべきである」と語る。[53] また、時局悪化の中で、中国人孤児の教育方針の第一に日本化を挙げた後で、「どうか支那語を忘れないようにして下さい。日本人になってしまっては困る。どこまでも、支那人として帰来の日郷国のために導いてやって下さい」と送り出した中国側の意向に沿おうとする。[54]「育児と教育のことは、支那は支那としてのねらひがある」[55] 云々という表現もそうである。どこまで言行一致していたかという観点よりも、政治・経済・社会方面の戦略も戦術も持たなかった彼のような人物が、戦後すぐに社会復帰できた事実を前に、いろいろな解釈は可能である。ただ、彼に「戦争責任」という自覚がなかったというよりも、そんなことは、はじめからよくわからなかったのではないかと思われてならない。いわゆるテクノクラートでもなく、カオスを許容した“不思議な自由人”としか言いようがないのである。

彼の生命哲学に触れようとする先行研究は、共通に「保育曼陀羅」という一枚の絵画[56] に行き着くようである。しかし、一言でかたずけられないので、悪戦苦闘している。中では、専門の研究者とは言えない荒俣宏の「ふつうなら進化論とか遺伝学がすぐ登場するところだが、かれの選んだ哲学はすこしばかり違っていた。生命の本質は次世代を育てることにある。これを育てあげることによって、生物は継続性を維持し、社会を維持することができる」という指摘が、最も明快な答えになっているように思われる。[57] その基本原理の解明のために、そしてその応用問題を解くために、彼は自己の人生を捧げたのかもしれない。

註

1）山田洋次「ふみさん」（「私の履歴書」⑦）日本経済新聞朝刊　1996年10月7日

2）倉科平「西村真琴－松本平人物誌・47」(1)～(3) 参照。氏には、松本の『市民タイムス』編集部を介して電話でご教示いただいたが、体調を崩しておられ、お会いすることはできなかった。

3）水野浩志「西村真琴」（岡田正章他編『保育に生きた人々』風媒社　1971　所収）326頁

4）西村「我が運命を決した松本中学」（『長野県松本中学校創立五十周年記念誌』1936

所収) 39～41 頁

5) 井出『終わりなき旅－「中国残留孤児」の歴史と現在－』岩波書店　1986　10～11頁

6) この点では、詳細な校史類よりむしろ『高校風土記　松本深志高校ものがたり』毎日新聞松本支局編　郷土出版社　1989、が参考になった。

7) 同書所収の「西村真琴」を執筆した桐原義司氏（元松本市教育長）からも、同校同窓会事務局を介してご教示いただいた。その時すでに脱稿されており、同書は、1996年12月20日に刊行された。

8) 西村　前掲書　36頁

9) 尚志社同人『尚志社記念誌』　明文社　1969　35頁

10) 西村　前掲書　35～37頁

11) この同期生は尚志社でも一緒に活動した米倉龍也で、全国農協連合会長、深志同窓会長他を歴任した（『深志人物誌Ⅱ』126頁、参照）。

12)『長野県松本中学校・長野県松本深志高等学校　九十年史』1969　同校同窓会　165～169　178～179頁

13) 前掲書　204～207　219頁

14) 前掲書　256～258頁

15) 前掲書　258～260頁の他、『深志百年』深志同窓会　1978　203～204頁、「座談会・尚志社を語る」前掲『尚志社記念誌』所収、他を参照。

16) 前掲『深志百年』　200～203頁

17) 毎日新聞社編『最新昭和史事典』　毎日新聞社　1986　211頁。詳しくは、頭山統一『筑前玄洋社』葦書房　1977と、巻末の「参考文献」を参照。

18) 前掲『尚志社記念誌』所収の座談会における、棚橋の発言（80～82頁）。

19) 酒井「尚志社の始祖松原温三」前掲書所収　35頁

20) 前掲『九十年史』　261～262頁

21) 前掲書　263～266　271～272頁

22) 前掲書　267～269 頁

23) 西村「思い出る小林先生」『交友・頌徳号』1939（前掲『高校風土記　松本高等学校ものがたり』141～142頁、参照。）

24) 小林については、とくに「小林有也校長の死去と逝きし後」の項（前掲『九十年史』

所収　450～457頁）を参照。

25）倉科　前掲論説（６）

26）松本健一『白旗伝説』新潮社　1995　127～156頁

27）倉科　前掲論説（７）。なお、西村かずをの日本女子大関係履歴については、宇都栄子専修大学教授の手をわずらわせた。

28）西村『大地のはらわた』481～485頁、同『科学随想』85～90頁参照。

29）西村「我が運命を決した松本中学」38頁

30）倉科　前掲論説（９）

31）蝦名賢造『新渡戸稲造－日本の近代化と太平洋問題』新評論　1988　186～195　348頁

32）『北海道大学水産学部七十五年史』1982　16～17　22～23頁

33）前掲書　429頁

34）阪井輿志雄『マリモの科学』北海道大学図書刊行会　87～91　103～104　194頁

35）今田敬一「大正時代の黒百合会」『黒百合会六十周年記念』1966。なお、記録によれば、西村は昭和６年11月開催の第25回展覧会に出品している。(『黒百合会60周年記念』北大美術部黒百合会　1966　52頁)

36）井上晴樹『日本ロボット創世記』ＮＴＴ出版　1993　43頁
北大在勤中の西村については、前掲『七十五年史』17、103、212、432、各頁参照。

37）前掲『七十五年史』の巻末年表参照。

38）『退職者履歴資料・10』(1927　北大図書館北方資料室所蔵）、前掲『深志人物誌Ⅱ』135頁、参照。

39）詳しくは、『大阪毎日新聞社史』1925、を参照。

40）西村『水の湧くまで』大阪毎日新聞社、1927、所収の「序」（本山執筆）参照。

41）『五十年後の太平洋』大阪毎日新聞社　1926　667頁

42）井上　前掲書　43頁

43）橋川文三『黄禍物語』筑摩書房　1976　67～72頁

44）『五十年後の太平洋』661～663頁

45）前掲書　675～678頁

46）橋川　前掲書　77～78頁

47) 馬場伸也『満州事変への道－幣原外交と田中外交』中公新書　1972（初版）

48) 大杉一雄『日中十五年戦争史－なぜ戦争は長期化したか』中公新書　1996

49) 西村「我が運命を決した松本中学」71頁

50) 西村『科学随想』中央公論社　1933　4～10頁

51) 『魯迅選集5』青木文庫　1963　298頁

52) 片山智行『魯迅』中公新書、1996、11～14、171頁参照。片山によれば、魯迅にとって、中国民族に最も欠けているものの一つ、「誠」の典型こそ、仙台医専在学中の魯迅のノートを毎回添削してくれた藤野先生の真面目な行為であったという。口先だけでない実直な人間を日本人に見出すならば、上海の古書店主・内山完造も西村も、魯迅には第二第三の「藤野先生」であった。なお、魯迅は、1910年8月に杭州に移ってから紹興府中学堂で博物学を教えている。ことに植物採集が好きでたんねんに標本をつくったという。(97. 104頁参照)

53) 西村『新しく観た満鮮』創元社　1934　244～246頁

54) 西村「戦禍の生んだ支那孤児の愛育」『社会事業』23-8　1939.11　23～24頁

55) 西村「支那の子供」『保育』1938.4　36頁

56) この絵は、雑誌『保育』1938. 9の巻頭口絵としてフルカラーで掲載された。彼は「天地自然は生命を守り保育することに念慮をこらし、このことを軸に宇宙から人間までの調和を保って存在している。育児は自然の天業であって、子を私物化する親は天意にもとる」と説明している。

57) 荒俣『大東亜科学綺譚』筑摩書房　1991　32頁